中欧研修
～私にとっての言語～

城西大学　経営学部
２年　野口大成

今回、中欧研修に参加し筆者は各国で様々な言語に触れた。島国であり古くから本州を中心として主に日本語という一か国語で生活してきた日本。そんな日本とは大きく違い、様々な文化が入れ混じっている中欧地域の言語と民族の歴史について文献資料をもとに述べ、筆者にとって言語とは何なのか、今回の研修での経験をもとに以下にまとめる。

筆者は日本に生まれ日本語を話しながら生活してきて、英語は大学に入学するまでは授業で成績をもらうために勉強してきた。そのため英語は少ししか話すことができず、筆者の周りの学生も同様な人がほとんどだ。そんな中、今回、中欧地域で日本語を学んでいる学生と交流をした際にとても衝撃を受けた。それは日本語を学んでいる学生の半数以上が母国語と英語やほかのヨーロッパの言語、それに加えてまだ二年程度しか勉強していないという日本語まで完璧に使いこなしていたからだ。もちろん勉強量の差もあると思うが、それ以外の要因があると考えた。

その要因として挙げられるのが、中欧地域にはルーツの違う多種多様な民族が共存していることとその民族と言語の歴史だ。チェコとスロヴァキアを例にとると、

「2001 年の国勢調査に基づいてそれぞれの民族別人口構成を見てみると、まずチェコではチェコ人が 90.1%、モラヴィア人が 3.6%、スロヴァキア人が 1.8%となっている。(中略)またロマ（ジプシー）は 0.1%だがこの数字はもっと高い可能性がある。（中略）スロヴァキアではスロヴァキア人が 85.8%、ハンガリー人が 9.7%、ロマが 1.7%であるが、このロマも実際にはこれよりずっと多いと言われている。」（注１）

と、あるように日本の在日外国人の割合が約２％（OECD による集計）であることと比べてみて外国人や他民族が多いことがわかる。現在でこそチェコに住むチェコ人の割合やスロヴァキアに住むスロヴァキア人の割合は多い。ただ、古くからこの地域の多くの民族が、宗教の違いなどによる争いで移住を繰り返していた。そのため、現在、チェコ人やスロヴァキア人と一括りにされているがそのルーツは人それぞれ違うといえる。また、地域により様々な王国や国の支配から話す言語も制限されていた歴史がある。このような背景から生活の中で様々な言語に触れる機会が多く、自然と話せるようになったり、ほかの言語を学ぶということ自体のハードルが下がったりしたのだと考えられる。

チェコ人にとって、チェコ語こそがチェコ人としてのアイデンティティだという考えが広く普及したのが、1918 年にハプスブルク帝国が崩壊し、民族自決の原理によってチェコスロヴァキア共和国が成立するまでの過程にあると考えられる。

「18 世紀半ばの啓蒙改革期にチェコの行政財はオーストリアと一体となり、この行政上の統一・簡便化からドイツ語が公用語として採用された。」（注 2）

とあるように 18 世紀半ばのチェコでは公用語としてドイツ語が使われていたことがわかる。

当時のチェコでは繊維工業が発達していて、帝国の経済的中心地の一つとして発展していた。そんなタイミングでチェコ貴族はある考えにたどり着いた。

「チェコ王国の歴史的権利を主張しながら自らの保身を図ろうとし、そのために自らの住む地域を尊重し、その歴史・文化を見直して将来に向かって育んでいくことを目的とした。（中略）自分たちのアイデンティティを何処に求めるのか？中心となったのはチェコ語である。」（注３）

とあるように、公用語としてドイツ語が話されたり、家庭教育でフランス語が推奨されたりする中、チェコ貴族をはじめとする多くのチェコ人は国民社会を形成する上でチェコ語は必要不可欠であると考えた。このような歴史から、言語とはアイデンティティを確立するための大きな要因になりえる可能性が大きいということと、言語の持つ大きな力を感じるとることができた。

これらの歴史をふまえた上で今回の研修で日本語を学んでいる学生との交流や現地での経験から感じ取ったことについて述べる。

筆者はチェコのブルノ滞在中に、あるチェコ人の女子学生と知り合った。日本語を学んでいる学生ということで、主に日本語でコミュニケーションをとっていた。ただ、彼女が日本語で伝えることのできない単語があったときには英語でやり取りをしたのだが、彼女がまだ日本語が完璧ではないのと同じように筆者の英語も完璧でなく少し困った。そんなとき何とかして伝えたいことを伝えようと英語で一生懸命話していると、相手に伝えることができた。今までは英語のテストやTOEICなどで分からない問題があれば諦めていました。しかし実際に英語を駆使してコミュニケーションをとっているときには諦めたくないものだ。

「語学を成績のために学ばないでください」

という言葉を引率のホルバート先生から頂いたのだが、この時がこの言葉の意味を理解した瞬間であった。

また、ブルノ滞在中の化粧室の中で筆者よりも世代が上の男性に声をかけられた。少しコミュニケーションをとってみたが、彼はチェコ語しか話せないようで英語は一切通じなかった。また、筆者自身、チェコ語は軽いあいさつ程度しかできないため困った。その時に思い切って日本語で話してみたら、どうやらその時の状況からニュアンスは伝わったようで、嬉しそうにチェコ語で返答してくれた。この時に、言語というのはコミュニケーションをとるための一つのツールであるだけで何より大切なのは伝えようとする心なのだということを身をもって感じることができた。

スロヴァキアのブラチスラバで知り合ったスロヴァキア人の男子学生は、敬語と日本人の若い世代が使うようなカジュアルな言葉に加えて、関西弁を駆使して、日本語で遊ぶかのようにたくさんの面白い日本語で話をしてくれた。前記したように言語はコミュニケーションをとるためのツールでしかないため、このように言語を遊び道具のように使うこともできることを学んだ。彼とも英語で会話をすることがたくさんあったのだが、彼は、

「あなたの英語の使い方は間違っているがとても面白い。」

と筆者に対して言った。それはお互い様だろうと思って聞いていたのだが、その時に筆者は間違った英語を話してしまったら嫌だなという以前までもっていた英語に対する恐怖心がなくなっていて、ただ単純に英語での会話を楽しんでいることに気が付いた。この気付きは日本でただ漠然と成績のために英語を学んでいては気付けなかったことであったと考えられる。

筆者はチェコ、スロヴァキア滞在中での様々な学生との交流の中で、彼らの語学力の高さを感じ、学びに対する意欲、将来の展望など様々な話を聞いた。それらを聞き筆者の学びや将来に対しての意識の低さに情けないなと感じていた。そんな時、最後の滞在地となった、ハンガリー、ブタペストで今回の研修で知り合った学生の中で一番親しくなったハンガリー人の男子学生と出会った。筆者は彼にこの時に感じていたことについて聞いてみた。すると、

「何ヵ国語も話すことができるのは魅力の一つでしかない、あなたのコミュニケーション力の高さだって魅力の一つである。それに魅力があればプラスになるが、何かできないことがあるのはマイナスではなく、プラスにするための可能性である。」

と彼は筆者に対して言った。筆者に高いコミュニケーション力があるとは思ったことがなかったし、そのコミュニケーション力が魅力になるとは思ってもみなかった。

ただ今回の研修を振り返ってみると、どの街に行っても今まで触れたことがない言語があり、そんな中でも楽しめた大きな要因として考えられるのが、覚えたての現地の言語を使ってみたり、下手なりに英語で会話をしてみたりなど、積極的にコミュニケーションをとったことであった。自身で気付けずにいた、筆者の魅力を見出し、気付かせてくれた彼にはとても感謝している。

ここまで言語はアイデンティティを確立するための大きな要因になりうることや、それに対し言語はコミュニケーションをとるためのツールの一つでしかないことなどを述べてきた。

それでは筆者にとって言語とは何なのか、それは過去、現在、未来をつなぐものだ。言語があるから、過去の歴史について今を生きる我々が知ることができ、その歴史をふまえたうえでの現在の問題を考えることができる。そして現在の問題を考えることでより豊かな未来を創造することができるのだと私は考える。今回の研修で中欧地域の様々な歴史を知り、これからの未来、このような歴史をふまえてどのように取り組んでいけば良いのだろうかなどと考えるきっかけになった。これらの考えを持つことができたのは、言語があったからこそである。そして、筆者もこれから先に生まれてくる次の世代に、世界の様々な歴史を伝えられるようになりたいと考えるようになり、そのために、日本語、英語だけでなく、より多くの言語を学びたいと考えるようになった。

筆者は今回の研修で多くの素晴らしい出会いをした。彼らとの出会いで筆者の人生の可能性は大いに広がったといえる。本当にこの出会い、経験に感謝している。これからは彼らのように夢や目標に向かってひたむきに努力し、彼らの大好きな日本をより良い国にすることができるように努力していきたい。

参考文献

（注１）（注２）（注３）
薩摩秀登[編著]『チェコとスロヴァキアを知るための 56 章』明石書店　2009 年